２０２４年度広島市立大学外国人留学生選抜

（国際学部）

小　論　文　（１２０分）

２０２４年2月２５日

注　意　事　項

1　試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。

2　この問題冊子は**8ページ**あります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合には，手を挙げて監督者に知らせなさい。

3　解答用紙は**4枚です。解答はすべて解答用紙の所定の場所に記入しなさい。**

4　**受験番号は，すべての解答用紙の所定の欄に，必ず記入しなさい。**

5　解答用紙とは別に，下書用紙が**3枚**あります。必要に応じて自由に使用しなさい。

6　配付した解答用紙は，試験終了後にすべて回収します。

7　試験終了後，問題冊子及び下書用紙は持ち帰りなさい。

このページは白紙である。

第１問

つぎの文章を読んで，あとの問いに答えなさい。

なぜ博物館や図書館は，地域(a)ネットワークを構成する結節点になりうるのか。そこには，アメリカ市民が図書館に対して寄せる強い信頼感がある。

少し前の調査だが，2006 年，社会的提言活動を行うアメリカの NPO 団体パブリック・アジェンダが発表した報告書がある。

全米 1200 人に対する電話調査で，地元の政府，警察，メディア，公共図書館といった公的機関に対する評価を聞いたところ，「非常によくやっている」「よくやっている」と答えた人の割合を合わせると，［　①　］が［　②　］%でトップ，警察 68%，学校 56%，メディア 50%，地元政府 43%だった（図１）。

これは，地域のメディアや政府に対する評価の［　③　］を示す一方で，いかに図書館が市民からの高い支持を得ているのかの証左とされ，アメリカの図書館界では何度も引用された。

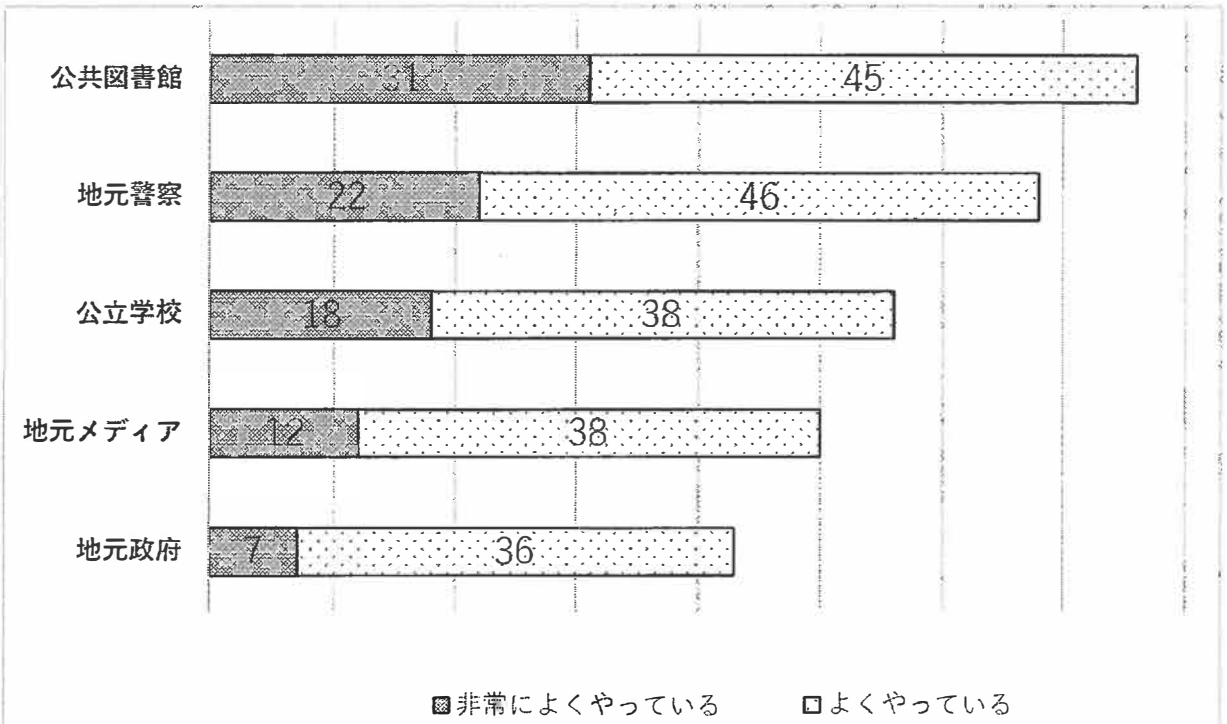

図1　地元公的機関に対する評価（%）

出所：パブリック・アジェンダの WEB サイト　Our Data: Search four decades of our research より作成

次は 2017 年，［　④　］が，全米の 3015 人に対して行った，情報源の信頼度調査である（図2）。八つの情報源を上げ，そこから出てきた情報を，どの程度信じるか聞いたところ，ここでも，ライブラリアンは非常に高い評価を得た。

彼らがもたらした情報は，4 割が［　⑤　］とし，医療従事者や家族・友人，メディア，政府などがもたらした情報よりも，高い信用を得たのである。

この評価は意味深長だ。説明するまでもないことだが，ライブラリアンというのは別に，自分たちにしかない独自の情報源をもっているわけではなく，メディアや政府，医療や金融の専門家たちが発信している公開情報のなかから，適当と思われるものを選んで利用者に提供しているにすぎない。

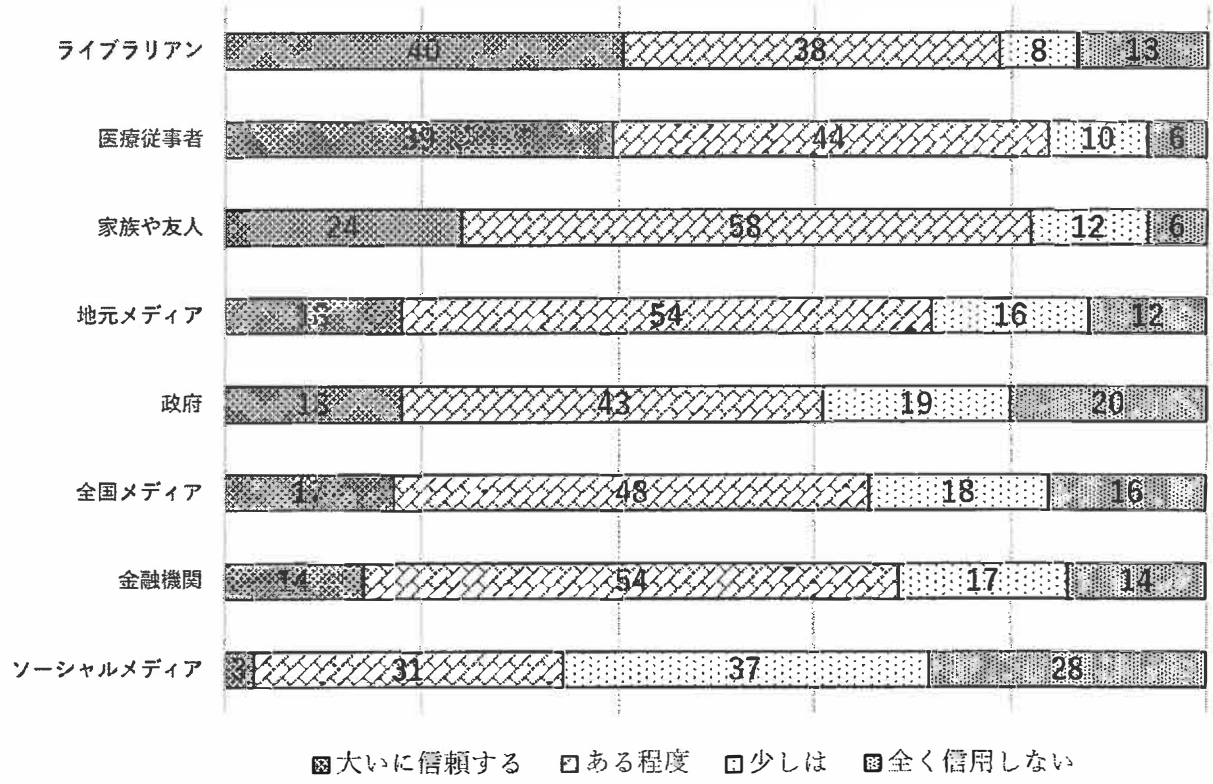

図2　情報の信用度(%)

出所：ピュー・リサーチ・センターの報告書より作成。※四捨五入のため合計が 100 にならない場合がある。

しかし，調査結果では，人々はその情報元自体よりも，図書館の方に高い信頼を寄せているという。これは，例えば同じ政府情報でも，そもそもの情報元である政府から提示されるよりも，ライブラリアンというフィルターを通して提供された方が人々は信頼する，ということを意味する。

その他にも，様々な組織や団体によって，視点や角度を変えた同様の調査が何度か行われたが，

いずれにおいても，図書館やライブラリアンに対する市民の高い信頼を裏付ける結果が示された。

こうしたなかで，「図書館が地域再生の(b)カギになる」と主張する地域コンサルタントたちも登場した。

米国で地域再生に長年取り組んできたリチャード・ハーウッドは，2014 年，「地域変革に今ほど図書館が必要とされている時代はない」と語っている。地域をつなぎ多くの人々を巻き込むためには，親しみやすさや中立性とともに住民からの信頼の高さが重要な鍵になるとし，「図書館は，いま米国で人々からの信頼を失っていない数少ない組織」だと分析している。

アスペン研究所のエイミー・ガーマーも，同じく 2014 年，1 年にわたる地域問題調査と，教育，政策，テクノロジー分野にまたがる数多くの著名人からの(c)インプットを経て，「公共図書館の再定義」と題する報告書をまとめ，公共図書館には他の組織にはない「地域変革者」としての可能性があると提言している。

アメリカ図書館協会（ALA）が，図書館の役割を「情報のハブ」から「地域づくりのハブ」へと発展させる可能性を模索し始めたのも，この頃からだ。リチャード・ハーウッドが率いるハーウッド研究所と組み，2014～2016 年の足掛け 3 年にわたる「地域を変革する図書館」プロジェクトを全米で展開した。ハートフォード公共図書館の警察と黒人住民をつなぐ活動は，このプロジェクトの支援を受けて生み出された成果のひとつである。

出典：豊田恭子『闘う図書館――アメリカのライブラリアンシップ』（筑摩書房，2022）より抜粋。必要に応じて表現等を変えてある。

問 1　空欄①～⑤をそれぞれ埋めなさい。（4 点×5）

問 2　下線部(a)「ネットワーク」，(b)「カギ」，(c)「インプット」の意味をそれぞれ 15 字以内で説明しなさい。（5 点×3）

問 3　アメリカの図書館は住民からどのようにみられているのか，本文にそくして 200 字以内で説明しなさい。（15 点）

第2問

つぎの文章を読んで，あとの問いに答えなさい。

ChatGPT（チャット GPT）がどうも気になる。こちらの質問に対し，あたかも人間が答えているかのように自然な言語で返事をするチャットサービスである。チャット GPT を含む生成 AI と呼ばれる人工知能は，文章，画像，音楽などを自動で生成することができる。

試してみると，なるほど文章は自然であり，なかなか行き届いた回答をしてくれる。ある種のユーモアがあり，もっともな教訓さえ与えてくれる。人工知能を研究する松尾豊が指摘するように[1]，結婚する2人の情報を入力すれば，結婚式のスピーチの概略も書いてくれそうだ。会議の議事録やメールの文面作りも可能で，現在，人間がやっている仕事のかなりの部分を代替することになる。医療や法律関係など高収入の職業にも影響があり，人類社会の大きな転換点になるかもしれない。

先日，東京大学の学園祭で，AI による模擬裁判が行われて話題になった。「法律時報」のような専門雑誌でも，法学者である成原慧がチャット GPT と，法律分野における人間と AI の共存をめぐって興味深い「対話」を行っている[2]。AI が現実に裁判官になれるかはともかく（生の人間よりむしろ AI によって裁かれたいという希望もあるはずだ），判例などの大量のデータを活用して法律家の業務を支えることは十分に可能であろう。

ただし，あくまで人間によるチェックは必要である。個別的な情報の正確さはかなり怪しく，わたし自身のことを質問したところ，同姓のフィギュアスケートの選手と混同した回答が返ってきた。大量の文章データの傾向をもとに単語を並べているだけで，表面的にはもっともらしくても，事実に反する偽情報をいくらでも生成する。

情報セキュリティーを研究するジョシュ・A・ゴールドスティンらが強調するように[3]，チャット GPT が政治的なプロパガンダに利用される危険性については，既に多くの警鐘が鳴らされている。AI によって生成された大量のテキストが，ネット上に溢れる日も近いだろう。憲法学者の山本龍彦は，生成 AI のポリシーやアルゴリズム次第で言論空間が大きく歪められ，国家の命運も左右されると警告する[4]。独裁国家においては，民間が開発する AI も政府の価値観によってアルゴリズムが調整され，政府の意向に沿った回答がなされうる。それはすでに現実のものとなりつつあり，AI の運営を監視する国際的な法制度の整備が急務である。

利用される個人や組織の情報をめぐるプライバシーやセキュリティー，そして著作権問題も考えると，人類は新たなテクノロジーと共にパンドラの箱を開けてしまったのかもしれない。経済学者で政治についての著作も多いダロン・アセモグルが強調するように[5]，あくまで人間の側に主体性があるべきだが，現実には技術が人間を支配することになりかねない。わたしたちの意識

や認識そのものがAIによって操作され，政治的に誘導されているとすれば，民主主義の危機は深刻である。

しかし，ここではさらにもう一歩踏み込んで考えてみたい。AIの危険性を論じることは重要だが，それ以上に，あらためてチャットGPTは「人間とは何か」を考えるきっかけとなりうるのではないか。

例えば，すでに述べたように，AIはいくらもっともらしくても，文章の意味を理解していない。しかし，それでは「本当の意味」とは何であろうか。このような本質的問いを提起するのは，日本の情報学を牽引してきた西垣通である[6]。確かに文法的にはつじつまが合っているとしても，それは形式的なものに過ぎない。文章とは本来，人間の生活体験に基づく意味内容と不可分である。AIは自律的知性体ではなく，あくまで人間のために利用すべき手段であるという西垣の結論に深く同意するが，形式的なつじつま合わせに日々追われる現代人にとっての「意味」とは何なのか，どうしても考えてしまう。

さらに，わたしたちの「オリジナリティー」も気になるところである。建築家の藤村龍至はこれからAIが設計する時代が来るとした上で，あらためて建築家のオリジナリティーがどこにあるかを問い直す[7]。藤村は建築家が指示するときの言葉に着目しているが，わたしたちは本当に言葉でAIをリードできるのだろうか。どこまでが自分の作品で，どこからがAIの仕事なのか，次第にその境界線が見えにくくなる時代が到来しつつある。

生成AIに囲まれて暮らすうちに，やがて「わたし」の輪郭すら融解していくはずだ。解剖学者の養老孟司と生命学者の小林武彦の対談では，ネット上の仮想空間であるメタバースで生きることによって「不死」を獲得する可能性も論じられている[8]。チャットGPTの時代だからこそ，あくまで自分の頭と身体を使うことに価値を見いだす人もいれば，そうでない人もいるだろう。どちらが望ましいかは，究極的にはその人次第となるかもしれない。

新たなテクノロジーを恐れるだけでは，問題は解決しない。「わたし」はどこにいるのか，「わたし」と「わたし」でないものを区別できるのか。人はいったい何を信じればいいのか。人間にとっての「意味」を再考する好機としたい。

1) 松尾豊「チャットGPT時代の勝者と敗者」（文芸春秋6月号）

2) 成原慧「Chat GPTと法」（法律時報5月号）

3) ジョシュ・A・ゴールドスティン，ギリシュ・サストリー「生成AIとプロパガンダ――高度な偽情報にどう対処するか」（フォーリン・アフェアーズ・リポート5月号）

4) 山本龍彦「運営の透明性は不可欠――AIは国家の命運をも左右」（聞き手・二階堂遼馬，週刊東洋経済5月20日号）

5) ダロン・アセモグル「『人間の主体性奪うAI開発を抑制せよ』MITアセモグル教授の警鐘」（聞き手・広野彩子，日経ビジネス電子版，5月12日デジタル）

6）西垣通「AIの『言語習得』とは何？」（公研４月号）

7）藤村龍至「AIと建築」（Voice６月号）

8）養老孟司，小林武彦「不老不死は人を幸せにするか」（Voice６月号）

出典：「生成AIとの対話――とける境界，「わたし」を再考」宇野重規
『朝日新聞」2023年5月25日より抜粋。 必要に応じて表現等を変えてある。
朝日新聞社に無断で転載することを禁じる。 承諾番号24-1018

問１　下線部「AIの危険性」とあるが，本文では具体的にどのような生成AIの危険性について述べられているか，200字以内で答えなさい。（20点）

問２　本文には述べられていない生成AIの用途の具体例を挙げ，生成AIと今後の社会のあり方について400字以内で論じなさい。（30点）